

蜂ニ刺サレタル話

四年 稲 賀 繁 美

去年九月から十一月にかけて、私の毎日は、私の肉体上数ヶ所の傷の治療に小一時間を費すことから成り立っていた。傷——といっ

てもその一つ一つはせいぜい直径1cm、深さ2〜3mmといった体の小さなもののだが、これがしつこくなおらない。カサブタができても内側はジクジクして、一向に完治しない、むき出しにしておけばおいたで化膿して来るので、消毒してはバンソークローをはっておくのだが、傷との闘いが持久戦の様相を呈するや、傷の周囲の皮膚まで変調をきたし、そのあたり一体が一種の皮膚病の如き異様な光景を現出するに至っては、いささか根負けしそうな毎日であった。なんで又このオレに白羽の矢が立ったのか、別に日頃の心がけが悪かったおぼえはなかったのだが……

夏合宿もあと少しで終了というある午后、元気な一年生を尻目に精根つきはてた観ある四年生の共同提案で、合気道部は、リクリエイションとしゃれこんだ。今から四年前、遠出をして雷雨にみまわれ、ぬれねずみとなつてほうほうの体でひき返した無残な体験を持つ四年幹部は、その思い出をふたたびというのも何やら憚られて、昨年できたとかいう遊歩道のお散歩をもくろんだ。溪流ぞいに急ごしらえの、木枝をはらつて一応歩行可能にしたといった感じの道らしきものがあるのである。

せせらぎの涼しげな音につつまれて、時おり吹きぬける山すその風に襟をひらきつつ、持ち前の脚力と肺活量にものをいわせて、呼吸ひとつみださず優雅にとかダラダラとか歩をすすめる我我にとつて、このもつぱら、都会育ちの山知らずをいきなり、自然

の雑木林の中に紹介されるためにのみ作られたといった感じの遊歩道が、ただ単に自然の甘美さと大いなる優しさとのみを我々に観せしめんとしているといった感想をいただくのは、しかしながらやはりいささか、都会人の自然への幻影、「自然」の理想視に他ならなかったのである。自然とはそんなに都合の良いものではない。我々は観客ではない、自然の内なる一員なのであった。

かなかなぜみの聞くからに心をひろやかにする羽音に耳を傾けつつ、視線を下に落して、世をはかなみ山中に隠遁した世捨て人を気取ってトポトポと歩をすすめていた私の目に入ったのは、何と地上におちた蜂の巣であった。半メートルもない狭い道の左端の草むらの上におちた巣いっばいに小さき黒きもの車座になって、皆一勢に尻と羽をふるわしている。私は目をうたがった。私より先に行つた連中はだれ一人この一触即発の蜂のちよつとした大集団に気付きさえしなかつたのだらうか。まことに知らぬという事はおそろしい。彼ら都会人は保護色をまとつたこの巣はおろか、たとえ蜂の興奮しきつたこの状態をちらとその視神経がとらえたにせよ、その頭脳においてかかる事態の意味する所を理解しなかつたゆえであらう、彼らは蜂を見なかつたのである。腹が空いたと思わねば料理の美香もにおわぬのと同断、私に先行した彼ら十数人の意識はことごとくこの蜂たちの社会の直面している前代未聞の危急を把握しそこなつたのである。

幼少時より山中を猿よろしく走り廻つて育つた私にとつて、しか

し事態は明白であつた。だが私は集団の内であつて自分一人が歩を止め得ぬ事をも又理解していた。この二つの想念の対立が蜂の巣の一步手前で私をして一瞬立ちどまらせたのである。この一瞬の躊躇が、ハチたちにつけ入るべき間一すきーを与えたのかもしれないがとにかく次の瞬間、今まで十何人も通つてきたのだから、という累積的、似而非数学的帰納法的判断から、私は結局蜂の巣の上をまたぎ越したのである。

私の判断の甘さは私の前足が再び地上に降り立つ以前にはやくも痛烈に批判された。それから後の十秒足らずの間、私のむき出しの下半身（——短パンしかはかないで山に入つたたくせして山歩き人間ぶるなどと言わないでいただきたい。他でもない、宿の主人が短パン、ゲタバキで、だいじょうぶ、なんぞととつてもない事をうけあつたのがそもその原因である）は、ついにカンニン袋の尾の切れた第蜂機動部隊全機の集中砲火のまっただ中に入つて文字通り蜂の巣と化したのである。

この戦闘に関しては私の直後を歩いていらつした田中先生のお言葉が一番正確にわが勇敢なる死闘の凄壮さを物語つてくれるものと信じる。

「いやねえイナガが突然何かおわめて走り出したと思つたら、ビヨンビヨン踊り出してね、それが、手や足を交互にそりゃせわしく上げ下げするもんだからこんなに踊りがうまかつたのかって思わず見とれてたら、（ハハ）いきなりオレの足にチクッと……」

こんな場合、私は「先生ノ蜂ですノ蜂！」と叫びつつ、他の連中に被害のおよぶのを恐れて田中先生の方へすつとんで逃げ戻る代りに、勇猛大胆にも横手へと駆け出そうとはしたのだが、何せ田中生すら、私の一世一代の大闘武（演武ではない）に見はれていらっしやるうちに蜂の攻撃にさらされた位であるから、まさに駆け出す暇もあらはこそ、ものの十秒とない戦闘終つて、命中弾を数えると何と十五、六発にのぼっていたのである。一秒に一つ二つずつ刺されたんじゃ、これはちよつと防ぎようがありませんよ。いかに運動神経すぐれた人と言えども（マシテイハンヤ私ニオイテヲヤ）。

体というやつ、一箇所が痛い、その所がひどく気になるものだが、元来健康だと、体に感覚のあることさえ忘れてしまうものだし、その逆で、足という足がまっ赤にはれ上がってしまうと、もう個々の痛みなんて弁別できなくて、およそどうでも良くなってしまうものらしい。

とにかく下半身火のついたような有様だから、目前に冷たき清流の流れ居たるを幸い、これに足を浸して冷却にこれ努める事とした。周囲の連中が「寒そー」なんぞといつて敬遠するのを尻目にもの二十分もうれしげにジャブジャブやつて、笹舟流したり流れの中の石を拾ったりしていたら、足のはてりはやがて、鈍い痛みへと昇華され、背筋を悪寒が走るに至った。お前顔が紫色だぞと一人、これはやばったかと急いで宿に帰るも、この荒療法がたたって、フルー

ツコンバの最中には既に果物の味もわからず、体はガチガチと震え、手には冷汗という、なまけなま。

例の如く発熱。まわりの喧騒——ただでも練習中はおとなしくて練習済むとばかりかみたいテレビゲームやら何やらにはしゃぐアホども、今晩はフルーツによる景気付けも加わって尚一層かしましいに力なく、おいねかしてくれよおと死にそうな声を上げつつ、真夏の夜の惨めなのたうちまわりとはなつたのであります。ホントに惨め。

思いかえせば今から四年前（常套句だ）、全身ケイレンといふけつたいな不始末をしでかし、あの時はのたうちまわろうにも体は一向に言う事を聞かず自分勝手にガタガタやっていた。あの悪夢もこの合宿場での経験であった。私の個人的な愛着にもかかわらずこ北志賀の自然は——そしてそれに対応してわが小さな自然としての肉体も——どうやら私の生存にとって、あまりよろしからぬ符牒のように思われる。田中先生曰く、「稲賀はもう一度ここに来たら死ぬんじゃないか」

うん、それもまんざら悪くないな。
願はくはみぎはの端にて夏死なん

その文月の合宿のころ